



らの支援も始まっています。過疎化に悩む里山ですが、大学と地域、自治体、そして企業が連携することで、エコミュージアムによる地域の活性化と、自然再生の両立を実践する新たなモデルも創れるのではと期待しています。

フィールドに出ると自然の中に宿る多くの秘密が見えてきます。それに気づき、仮説を立て、データを集め実証する楽しさがあります。生きものが対象のため思うようにいかないことも多いですし、雨の日も雪の日も野外でデータを取ります。でもそれが楽しい!

我々人間も宇宙船「地球号」の一員で、生態系を構成する一つの生きものです。SDGsが叫ばれる今日、他の生きものを知り、理解することは我々自身のためにもなります。画面だけでなく、野外へ出て自分の目で見て、手で触れる実践力を身につけること。また、地域の方々との交流で学ぶことも大切。フィールド研究では、良いコミュニケーションなくして、良い研究は生まれません。これからも里山を調査・研究の場として地域と協働し、オオサンショウウオの保全に貢献していきたいと考えています。

の特別天然記念物オオサンショウウオの調査研究・保全活動を、大学・地域・自治体と協働して実施しています。またオオサンショウウオを地域資源(展示物)として、地域全体を博物館とみなす「東広島エコミュージアム」活動を推進し、里山とオオサンショウウオを持続的に守っていくことを目指しています。

国の特別天然記念物は「生きた国宝」とも称される我が国を代表する生物です。しかし、実際に地域に足を運び調査をすると、オオサンショウウオが抱える大変な状況が見えてきました。人間が作った堰堤などで個体群が分断され、繁殖に参加できない個体、餌不足から痩せて死んでしまう個体、田へ流失する幼生がいまいました。全国的には外来種との交雑種も増加しており大ピンチです。その上豪雨災害の急増で、上流のオオサンショウウオの大半が流出し、さらにピンチは拡大。もう待ったなしの状況です。

オオサンショウウオを守るには「流域全体の保護モデル」が必要です。まずは「流出個体・痩せ個体の保護、交雑の有無・性別を確認し、個体登録を行い繁殖適地へ放流、幼生の育

成が急務です。次に「人工堰堤にスロープをつけ自発的な移動を可能にすること、スロープの効果を調査で検証することが重要です。さらに将来に向け、オオサンショウウオの問題を共有する普及活動も大切です。

このような活動には地域の理解と協力が必須です。博物館を通じた野外観察会や講演会、出前展示、LINEスタンプやグッズの開発、小学生用の副読本を出版するなど、幅広い活動を通じて認知度の向上を進めています。「地域資源(観光資源)」として地域の方々に「利益の見える化」ができれば、より多くの理解が得られ、結果としてオオサンショウウオの保全が進むと私達は真剣に考えています。近年では地元企業が